

「南京大学中国語現地実習参加報告書」

京都大学文学研究科修士1年 服部嗣人

①中国に行くのは今回の実習が2度目だった。1度目は観光で上海を訪れたが、滞在期間は1週間だけだった。今回の滞在期間は1ヶ月と長く、場所も南京という日本人にとっては名前だけが有名で実際にはあまり馴染みのない都市だったので、1週間の観光とは比べものにならない程深く中国に対する理解を深めることが出来た。私の専攻は中国思想で日頃の勉強は中国古典を読解することに集中しており、漢字の意味や形に対する関心は強いものに対して、漢字の音に対する関心は弱かった。しかし、実際に南京に行って南京で生活をしている中国人に中国語で話しかける必要が出てくると、発音の問題は避けて通れないことに気づいた。日本語では意識されていない「n」と「ng」の区別や有気音と無気音の区別を意識すること、それから一字ごとの声調をはっきり発音しなければ、中国人に中国語だと認識されない。こうしたことは当然と言えば当然だが、普段の勉強では読んでいる古典分の意味が分かれば良いので、漢字を調べるときには拼音のアルファベットと部首だけ見ていれば事足りてしまい、実際の発音をほとんど考えていなかった。南京実習を通して、こうした偏った勉強法、中国語に対する認識を改めることができたと考えている。

②南京では1ヶ月間ホテルに滞在したので、食事は全て外食だった。中国の都市部は飲食店が非常に多く、価格も日本に比べて遙かに安いので、様々な店を回って中国の料理を楽しむことが出来た。一方で、日本では味わったことがない程辛い料理に遭遇したり、野菜炒めの油が多すぎて胃もたれになったりと、どうしても馴染めないものもあった。他に楽しかったのは、高鉄に乗って上海に日帰り旅行に行ったこと。全く予定を立てずに土曜日の早朝に南京駅に行き、1時間ほど右往左往して高鉄の券を買った体験は、そのときは本当に大変だったが、今思い返せば、非常に有意義なものだったと思う。

③午前中に8時から12時まで4時間の中国語の授業があった。先生は、全く日本語を使わず基本的には中国語だけ（一部英語）で授業を受けた。午後は太極拳の練習や如意結作り体験など中国文化、午後の文化体験でも中国語だけで説明がされた。中国語しか使えない状況に置かれ、必死になって先生の中国語を聞き取ろうとしたことで、聞く能力が高められたと思う。週末には南京大学の日本語学科の学生との交流会があり、一緒に南京市内を観光した。

④中国は今でも発展を続けており、人々に余裕や希望があつて、社会全体が明るく前向きな雰囲気であるように感じた。修士課程修了後に研究者になるか就職するかは決めていないが、何れにしても、一度は留学や駐在などの機会を得て中国に住んでみたいと思った。